

命の連帯をもとう

吉武輝子氏の講演から

上原千津子

土浦小学校PTA主催の講演会における評論家、吉武輝子氏のお話しを上原千津子さんにまとめてもらいました。

最近では教育に熱心で子どもに理解のあるおかあさんが多くなつた。といわれる一方で、いまほど母と子の関係が悪化している時代はないと、いろいろの立場の人々が警告を発しています。

教育評論家の金沢嘉市先生は「わざわざ手をかけて、子どもを悪くしている」と言っているほどです。事実、『子どもの幸せのため』という大義名分をふりかざして子どもを不幸に陥れている例をみるのがまあります。

親が作りだす登校拒否

いま問題となつていることの一つに、登校拒否児童の増加がありますが、それは、このことと無関係ではないと思います。一流の高校、大学にはいりながら、登校拒否をおこして入院している学生がたくさんいるのです。

彼等は両親の考えによつて定められたコースを従順に歩まされてきました。常に目先の勉強——成績と入試だけのために——を強いられるばかりで、勉強のおもしろさを味わうことなく、主体的に生きる自由も持たないままに過ごして来たのです。したがつて、いざ大学にはいつて、主体的に学ぶ——大学とはそういうところ——立場に立たされると、全く戸惑つてしまい、大きな失望を味わうことになります。

また、学生生活の意義は、多くの友情を得るところにもあると思います。友だちづきあいの広さは、どれだけ無駄なことができるかで決まるのですが、彼等は勉強以外のことは、いつさい許されませんでしたから、他人とつきあうきつかけがないのです。

これまでの十六年間の努力の末に、学ぶことにも興味をもてず、また、友情も得られないとしたら、彼等がすべてにむなしさを覚えるのは無理のないことです。こうして重症の登校拒否に陥つてしまうのです。

否定用語の多い最近の母親

最近のおかあさん方は、子どもに否定用語を使うことがたいへん多いようです。点数だけを大切に考え、その他のことは何も認めない、そういう態度に接し続けるとそれが人間関係の最初に深いつながりを持つ母親である